

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



おけ 桶

グリーンランド・イヌイト

アマサリク地方

1912-22年頃収集

(高さ：大21.3cm 小13.3cm)

北方民族博物館だより
—第20号—

開館5周年記念移動展	2
講演会「極北のインディアンについて」	3
第10回北方民族文化シンポジウム	4
博物館フォーラム・博物館と地域研究	
「アイヌ文化の成立を考える」	7
地域国際交流フォーラム／常設展示室	10
Q & A／おしらせ	11
News	12

ノーザンピープルズ

Northern Peoples

～北方地域にくらす諸民族～

10月4日～10月10日

道民活動センタービル（かでの2.7）：札幌市

当館は、2月10日に開館5周年を迎えます。これを記念して去る10月4日から10日までの一週間、札幌市の中心部にある道民活動センタービル（かでの2.7）の一階展示ホールで、初めての移動展を開催しましたので、概要をご報告します。

北海道立の施設として道民にひろくサービスをするという視点に立てば、館が設置された場所から遠い地方での普及活動も重要な責務と考えられます。当館の場合、もともと地方に所在するたまたなか足運ぶ機会がないという道民が少なくないことから、道央圏の方々にご利用いただくとともに、人口の多い札幌で北方民族博物館の存在を宣伝するという目的で計画をすすめました。

展示内容は、それぞれ異なる地域に暮らしてきたサミ、ナーナイ、ウイльта、ニプフ、アイヌ、コリヤーク、イヌイト、アリユート、北西海岸インディアン、アサバスカ・インディアン^{アサバスカ}の歴史と文化について、民族ごとに紹介するものでした。寒冷で厳しい環境のなかで、さまざまな知識を集積して技術を開発し、自然と調和して生きてきた人びとの多様な文化を知ることは、我々にとっても多くの示唆を与えてくれるものです。しかし、まだ日本では民族学はなじみがうすく、館名や展示のテーマを聞いただけでは、堅い印象をもたれがちなため、110点の資料構成は衣類を中心とし、写真パネルなどを用いながら実際に使っていた人びとを思い浮かべやすいようにと心掛けました。これらの資料からは、動物の皮や腸、角、^{アヒ}牙などの素材のユニークさと、特徴的な文様などを堪能いただけたのではないのでしょうか。そして、展示室中央に置いたアザラシ皮製のイヌイトのカヤックは、アラスカのキング・アイランド型とされているもので、他の資料と比べて大きいということだけではなく、無駄のない洗練された機能美に注目が集まりました。ご講演をいただいた原ひろ子氏が1961～63年にカナダ北西準州で収集されたヘヤー・インディアン（自称カショーゴティネ）の



資料を借用し展示できたことは、国内にも少ない貴重な資料だけに、意義あるものになったと考えています。

このほか、会場内には出版物を閲覧していただくコーナーを設けたり、また、NHK北見放送局制作の「ロマン北方文化 ～北海道立北方民族博物館～」というハイ・ビジョン番組を上映させていただくことができ、北方民族とオホーツク文化の概要をわかりやすく紹介するとともに、本館常設展の雰囲気もお伝えできたと思います。

会期中約1,200人の来場者があり、いろいろな方と接することもできました。テレビのニュースや新聞を見ていらっしゃる方、札幌近郊にお住まいの当館友の会会員、また、かでの2.7内で開かれている各種研修会やコンサートなどに参加されている多くの方が目的の行事の前後や休憩時間中に観覧にこられ、博物館の存在や移動展の開催を知らなかった人たちにもご覧いただくことができました。観覧された方々からは、「こんなに興味深い博物館があったなんて知らなかった」「今度網走に行きます」「また札幌でやって下さい」と嬉しい言葉をかけていただきました。

移動展を終え、北方民族の文化と当博物館の活動を多くの方々にご理解いただくよい機会になったと感じるとともに、今後の活動を探るうえで、この経験を活かしていきたいと思っています。

（学芸課 齋藤玲子）

講師：お茶の水女子大学教授

原 ひろ子 氏



開館5周年記念移動展の関連講演会として、お茶の水女子大学教授原ひろ子氏に、「極北のインディアンについて」と題し、氏がフィールドとしたカナダ極北のヘヤー・インディアンの30年前の暮らしや考え方などについてお話をいただきました。以下にその概要を紹介します。

1. ヘヤー・インディアンの暮らし

ヘヤー・インディアンは北アメリカの北緯66度付近、カナダ極北部のマッケンジー川中流域に、狩猟漁撈を生業として暮らしています。1月、2月は零下35から40度、最低気温は零下50度にもなります。人口は350人。日本の本州の半分くらいの面積の土地で暮らしています。彼らは、キャンプ周辺の魚や動物や薪をある程度とってしまうと次の場所へと移動します。キャンプ地にとどまる期間は数日から2、3週間といったところ。そこでは一人一人が社会の単位を構成し、皆が生活に参加しています。もちろん子供も大人の仕事を手伝うというのではなく労働に「参加」しており、1歳の赤ちゃんでさえ、ほほえみを資源として回りに提供するという役割を果たしています。人びとは常に自分たちが頑張っているから生活ができるという自信に満ちている顔つきをしています。一つのテントの中に常に同じメンバーがいるとは限らず、今日一緒にいるからといって明日も一緒にいるという保証はなく、つまり夫婦という関係が固定されてはいないのです。それだけをとりあげて進化論者からは「野蛮」、「家庭生活がしっかりしていない」という批判が浴びせられることがあります。しかしこのように流動的に暮らすことが、食料の少ない地域での餓死、凍死を避けるための大事な知恵なのです。

ヘヤー・インディアンの「ヘヤー」は英語でノウサギのことで、彼らにとってウサギは魚の次に重要な食料資源でした。ウサギは10年サイクルで増減し、ウサギが少ない年では餓死者が発生しました。またカリブーやムースを捕る生活ですから、皮なめし技術が発達しています。複雑な工程

を経て加工された皮を日本に持ち帰って分析したところ、大変な強度や耐久性をもっていることがわかりました。ヘヤー・インディアンにとって犬は橇を引かせるために大切でしたが、1970年以降は橇がスノーモービルに替わったことから犬はペットとして飼われるようになりました。何か事がうまく進まなかったときのイライラや嫉妬心解消のためなど、犬はヘヤー・インディアンの心のバランスをとるためという「役割」を果たすようになりました。

2. ヘヤー・インディアンの生死観

人は生きていながら常に、肉体から魂が出たり入ったりしていると考えられています。そしてある時、肉体に魂が戻らなくなることがあります。それがヘヤー・インディアンの人達にとっての「死」なのです。大半の人は12歳くらいまでに守護霊というのが憑くようになります。たいていはテン、キツネ、鳥などの動物で、夢の中に現われお告げをします。彼らは自分の守護霊となっている動物は絶対に捕って食べることはしません。ヘヤー・インディアンにとって守護霊は、冗談を言い合いながらやりとりをするリラックスした超自然的な存在です。その守護霊から、「おまえは間もなく死ぬよ」といわれたときその人に死が訪れることとなります。周囲の人は、「死ぬ」と守護霊から告げられた人の言いたかったことを聴いてあげるなど、希望することのすべてを叶えてあげます。そうすることによって本人は安らかに死を迎えます。身の回りのものは死ぬ前にすでに周囲の人にプレゼントされます。「いい顔で死なせる」ことで、死者はいい旅を続けてそして人間の世界に戻ってくるのだと信じています。ヘヤー・インディアンの世界では5歳の子供でも、死ということをよく知っています。私たち日本人にとって、人間の尊厳を考える上でヘヤー・インディアンの人たちの死に対する考え方は参考になるのです。

第10回北方民族文化シンポジウム

『北方の島嶼における人と文化』

今年度の北方民族文化シンポジウム（主催：財団法人北方文化振興協会、オホーツク国際流氷ロード網走市実行委員会）は、10月20、21日の両日、網走セントラルホテルを会場に開催されました。

今回のシンポジウムは、一昨年度の「北方針葉樹林帯の人と文化」、昨年度の「ツンドラ地域における人と文化」に続くシリーズであり、「北方の島嶼における人と文化」をテーマに発表、討論が行われました。

矢島國雄（明治大学）、岡田宏明（北海学園大学）、スチュアート ヘンリ（昭和女子大学）の各氏が座長を、また岡田淳子氏（北海道東海大学）、大林太良（当館館長）がコメンテーターをつとめました。以下に、各発表の要旨と討論の概要を紹介します（発表順）。

■ 山田悟郎氏（北海道開拓記念館）

「千島列島の遺跡分布と環境適応について」

千島列島には約100カ所の遺跡が分布するが、その大部分は北海道東部と類似した森林植生が分布する南千島諸島に集中し、植物分布境界線となっている宮部線を越えた中部千島・北千島ではその分布は限られたものである。南千島では縄文時代各期の遺物も採集されているがその数量は少なく、確認された遺構も乏しい。南千島に遺跡分布が限られることから、この時代の生業活動の中には森林からの資源採集も含まれていたと考えられる。

住居址群や貝塚の大半は縄文時代以降のもので、遺跡数、遺物量もこの時代になると増加する。海洋適応の結果、生業活動の中心が海上の狩猟・漁撈活動に置かれていた縄文時代前半期には、陸上資源に乏しい中部千島までその分布域を拡大している。しかし、河川漁撈が主生業となった縄文時代後半期になると再び遺跡の分布は南千島に限られる。海上の漁撈・狩猟を主生業としたオホーツク文化期には遺跡数・遺物量ともにさ

らに増加し、刻文期の土器を伴う遺跡は北千島まで分布範囲を拡大するが、その後続く貼付浮文期には再び南千島の域内に遺跡の分布は限られる。

千島列島での遺跡分布をみると、道東部で海洋適応した時期には一時的に、生態系が異なる中部・北千島に遺跡の範囲が拡大するが継続性はない。千島列島に限ってみた場合、島嶼に分布したから海洋適応したのではなく、海洋適応した結果として島嶼に進出できたと考えるべきであろう。

■ 佐々木亨（北海道立北方民族博物館）

「千島アイヌの精神世界にみる海への適応」

北千島においては、サケ・マス類が遡上する河川をもった島が少なく、またどの島も陸獣があまり生息していない。しかし、トド、アザラシ、オットセイといった海獣やエトゾリカ、チシマウガラスやカモ類などの鳥が豊富に生息しており、北海道とはかなり違った自然環境のもとで、千島アイヌの生活が営まれていた。

このことから、クマヤシカ、サケ漁を生業の中心とした北海道アイヌの精神世界とは異なった、海に適応した千島アイヌの精神世界があることが考えられる。

その特徴としては（1）千島アイヌの精神世界において、山の存在は極めて薄く、海に精神世界の拠り所がある。それは伝説・神話に登場する動物と千島アイヌとの関係や、「イナウ」や「木偶」が千島アイヌにとって重要な海での航海の際に、その安全を祈願するために現れたことからわかる。一方で、アイヌに固有の「山」対「海」の世界観もみられる。しかし、（2）生業活動の中心となる海獣や鳥の霊送り、人獣婚縁の神話など、千島アイヌにとって重要な動物に対する特別の扱いが認められない。これは、民族誌があまりないため記録されていなかったことのほかに、ロシア正教の影響があると思われる。



■ ジェイムズ・サベル氏

(カナダ・マギル大学)

「カナダ・中部極北圏の島嶼における

チューレ期エスキモーの生業—居住体系」

カナダ中部極北圏に、A.D. 1000～1500年頃にかけて、海洋適応文化であるチューレ文化があった。

この文化期の住居遺跡から多くのクジラの骨が出土する。私たちの研究グループでは、ここ10年ほどの間、チューレ文化期に属する遺跡から出された1,564体のホッキョククジラの骨を測定した。その結果、生後1年ほどの体長7～9mのものが多いことがわかった。さらに、1990年における寄り鯨の分布をみると生後1年のクジラだけではなく、幅広い年齢のクジラが岸に打ちあげられることがわかった。したがって、チューレ期では小さいクジラを積極的に捕獲していたと考えられる。またこの一連の調査から、サマセット島南東部においては、ホッキョククジラの捕獲量が多く、それに大きく依存した中核捕鯨地域と、依存度の低い周辺の捕鯨地域があることがわかった。

一方、チューレ期の居住パターンと捕鯨の関係を考えるにあたり、ビンフォードの狩猟採集民のモデルが参考になる。毎日の食料を周辺の採集地域で集め、移動を頻繁に繰り返すフォレンジング・システムと、特定の地域で専用の手段を用い食料を調達し、それを貯蔵する移動性の低いコレクティング・システムがある。チューレ期において、ホッキョククジラへの依存度が高い中核捕鯨地域は後者のシステムであり、周辺の捕鯨地域は前者であると考えられる。

さらにいくつかの中核捕鯨地域の分布をみると、お互いの地域が接触している方が、接触していない地域よりも、捕鯨に関する情報の交換や労働力交換におけるシステム効率がよいと考えられる。

■ ドナルド・クラーク氏

(カナダ国立文明博物館)

「コディアク島、アラスカの豊かな島の

文化生態学」

アラスカ半島沖にあるコディアク島では、約7000年前から3つの文化伝統が継続している。その間、島の豊かな自然環境を利用して人びとは生活し続けており、太平洋エスキモー文化のサブエリアと考えられる。

Ocean Bay (オーシャン・ベイ) 期 (7000～3800年前) では、海洋に適応した文化が存在しており、離頭銛^{もり}、ヤス、細石刃などで海獣狩猟が行われてきた。住居は初期では床面が方形、晩期では円形のものを用いられていた。

続くKachemak (カチェマック) 期 (3800～800年前) は、ベーリング海のエスキモー文化と結びつく、古い北太平洋文化の一部である。初期に使用された道具はあまり装飾が施されていなかったが、後期では石ランプなどへの装飾、死者の儀礼、口唇具などさまざまな文化が発達した。また狩猟・漁撈具はOcean Bay期に比べあまり変化がなく、住居の床面も円形である。

Koniag (コニアグ) 期 (800年前から現在) の1784年には島の人口は8,000人であり、それ以前はさらに多かったと考えられる。この文化期には、トリカブト毒を塗った矢を使用した、カヤックによる海獣狩猟が盛んに行われた。住居は床面が方形の大きな部屋を中心に、その横に小部屋が付属した半地下式であり、19世紀では1軒に20人ほどが生活していた。この文化はアリュートやアメリカの北西海岸インディアンと共通しており、Kachemak期から継承した文化とともに周辺地域からの人口移動による文化の導入があったと考えられる。



■ ディビッド・イエスナー氏

(アラスカ大学アンカレッジ校)

「高緯度環境における島嶼の生物地理学と

人口の持続性—アリューシャン列島および
ティエラ・デル・フエゴの事例—」

高緯度沿岸地域は、狩猟採集民が生活するには最適な地域である。それは、バイオマス（エネルギーとしての生物資源）が多様で海洋生産性が極めて高いこと、遡河性回遊魚や渡り鳥、海獣が豊富であることなどによる。

民族誌や考古学的データから、アリューシャン列島は海洋資源が極めて豊富でまた安定しているため、長期間にわたり多くの人口を維持してきた。

アラスカ半島に近いアリューシャン列島東部のUmnak（ウムナック）島の考古学調査から採取した動物の骨を分析し、住居パターンを再構築したところ、恒久的な村落を形成していたこと、その周辺には生産性が低く、短期的に利用されていたキャンプ地があったことがわかった。恒久的な居住基盤となる集落はアリューシャン列島中央部から西の地域にはみられず、これらの地域では人口密度も東部のように高くなかった。

一方、南米最南端のティエラ・デル・フエゴ島における資源構造は、アリューシャン列島とは異なっている。島と本土との距離が近いため陸上資源により多く依存し、マゼランペンギンも重要な食料資源であった。また海獣繁殖地が少なく海洋資源はあまり利用されていない。そのためフエゴ島では、海獣狩猟具や技術が発達しなかった。このような環境の相違は人口の定着の仕方反映している。

■ 大島 稔氏（小樽商科大学）

「民族誌からみたアリュートの生業と文化」

アリュートは列島の島々を漁撈キャンプ地あるいは狩猟場所として開発してきたが、この活動を支えたのは、唯一の交通手段としての皮舟と、霧の多い不安定な気象の中でも航海することができる地理的知識、風・潮流を観察した上での海流による航海術である。樹木が生育していないアリューシャン列島では、皮舟製造には流木が重要であり、それを素材とする洗練された曲げもの工芸技術がある。また、舟の皮を供給する大型海獣狩猟が必要不可欠である。その背景には、トド、オットセイ、アザラシ、ラッコ、セイウチなどの豊富な海洋資源と高度な狩猟技術があったことがわかる。

もう一つの特徴は、変化に富む活動を強いられる、複雑なしかし豊富な資源のある海岸部にみられる海浜経済である。男たちが狩猟に出ている間、定住地に残された老人、子ども、女性たちは日常的活動として、浜と干潟でタコ、ウニ、ハマグリなどを採集した。それが、狩猟に比べ安定した食料資源を供給し、過酷な気象条件によって引き起こされる飢饉を回避させた。

この事例をもとに、島嶼適応特性と海洋適応特性の関わりについて総合討論で議論を進めたい。

2日目の午後に行われた総合討論では、両日の発表を受け、千島列島、アリューシャン列島においては大陸からの距離、地形、島の大きさ、動物の繁殖域と遡河性回遊魚の有無、海水の有無、などをもとにある程度エリアを設定して、そのエリアごとに環境や文化の特徴付けをおこなう方が適切であるとの意見が出された。さらに、コディアク島を含めた3地域における舟の利用形態、居住地とキャンプ地との関係などについて比較を行い、また海水域と無海水域における海洋資源利用の違いなどが議論された。

(学芸課 佐々木亨)

博物館フォーラム・博物館と地域研究

『アイヌ文化の成立を考える』

11月30日、網走市サイクリングターミナルにおいて、「アイヌ文化の成立を考える」をテーマに、第3回目の博物館フォーラムを開催しました。

まず、遺跡出土の動物遺存体の分析を専門としている佐藤孝雄氏、利尻・礼文島を含めた道北地域の遺跡情報を収集されている西谷栄治氏、史跡整備、分布調査などをもとに道東のアイヌ文化の形成を追及されている榎田光明氏の三氏に事例に基づいた研究発表を、そのあと吉崎昌一氏に、先史時代の遺跡の土壌から発見される栽培植物種子について講演をいただきました。総合討論は、会場からのたくさんのご意見ご質問を含めながら進行了しました。

以下に内容の一部について、日程にしたがって紹介します。

[事例研究発表]

■ 佐藤孝雄氏（常葉学園富士短期大学）

「続縄文文化期以降の狩猟・漁撈活動—近年の出土動物遺体が提起する新たな研究課題—」

遺跡から出土した動物遺体の分析をもとに続縄文、擦文文化、アイヌ期の生業活動について研究動向の一端と、今後の課題を提示する。まず続縄文時代の遺跡に、礼文島の浜中2遺跡がある。現在調査が進行中であるが、続縄文初頭の多量のアワビ貝を含んだ遺物包含層が現われている。意外なことにトド、アシカ、オットセイなど海獣類はほとんどなかった。またイヌの骨が多量に見つかっている。しかもこのイヌは形質学的にオホーツク文化の遺跡から発見されるイヌに近いという結果が得られている。続縄文時代後半になると、河川流域でのサケ・マスを中心とした漁撈活動が盛んになったという実態が明らかにされてきている。

擦文文化期では、とくに石狩川流域のサケ漁の存在を示す事例として、築遺構や住居内のカマド、そこから発見される魚骨などがある。さらに

最近、擦文文化の狩猟活動を示す重要な資料が発見されている。道東の羅臼町オタフク岩遺跡がそれで、アザラシ、トド、アシカ、オットセイなどの骨が出土している。これらと共に、とくに注目されるのが儀礼を示すヒグマ頭骨の存在である。遺跡出土の動物遺体から河川流域のサケ漁、海獣狩猟、ヒグマ猟の在り方を検討すると、民族誌に知られるアイヌの狩猟漁撈形態の基礎は、その大半が擦文文化期までに確立していたと考えられる。アイヌ文化期については近年、とくに海岸部の貝塚が調査されるに伴い多くの動物遺体が得られている。興味深いのは、地域内の近接する遺跡同士であっても魚種の量的構成の著しい違いが見られることである。

■ 西谷栄治氏（利尻町立博物館）

「道北地域における続縄文時代の

展開について」

ここでいう道北地域とは利尻・礼文島と、宗谷北部ということにする。この地域には続縄文時代の遺跡は43あることが知られている。近年いくつかの遺跡が調査され、道北の続縄文文化の枠組みを考える上での課題が明らかになってきた。

続縄文時代遺跡の立地はほとんどが海岸部の低地あるいは段丘上にある。むしろ河川沿いは少ない。このような遺跡の立地からは大きく海に依存した生業があったと思われるが、十分な資料や情報には恵まれていない。道北地域にどのような文化が展開されていたのであろうか。

この地域の続縄文土器にはおよそ6型式ある。まず恵山式土器。これは道南から日本海側を北上した土器（日本海系土器と表現）と考えられ、離島では断片的、稚内では声間大曲川遺跡でまとまって発見されている。次に道東オホーツク海沿岸を北上した土器（オホーツク海系の土器と表現）に宇津内Ⅱa式、同Ⅱb式土器がある。礼文島、宗谷地域での発見例がある。また断片的な資料だが後北式土器がある。内陸から道北に至ったと考え



られるが、出土数は極めて少ない。さらに系統がはっきりしないが在地の土器と考えられるものに仮称メクマ式土器と香深井式土器がある。これらは本州東北地方の土器文化の影響を受けているという見方がある。最後に北方系の土器としてサハリンで型式設定された鈴谷式土器がある。

これら6型式の大きな流れは、縄文時代前期に日本海系土器、在地系土器があり、前期後半からはオホーツク海系、内陸系土器、北方系土器が入ってくると考えられる。それぞれのどのような接触関係があるかは今後の問題である。

道北地域の縄文時代遺跡の立地から、生業は大きく海に依存していたと思われるが、その在り方は一様ではない。利尻島種屯内遺跡や礼文島浜中遺跡において在地系土器包含層から出土する鯨骨製ヤスと動物遺体は海獣狩猟よりも漁撈をイメージさせる。恵山式期にみられる豊かな漁撈文化と後の鈴谷式期の海獣狩猟との狭間に、漁撈を生業とする時期があった。この文化的系譜はどこに求められるか大きな課題である。

このように道北地域の縄文時代の展開を考えると、当該地域は在地系土器や鈴谷式土器に見られるように北海道全体から見れば極めて地域的特色を有している。

■ 梶田光明氏（標津町ポー川史跡自然公園）

「トビニタイ文化、擦文文化の様相

—根室管内を中心として—

アイヌ文化は擦文文化の生業を基盤としつつ、クマ送りをはじめとしたオホーツク文化を受け継いで成立したと考えられている。では実際にどのように受け継がれたのかあるいはそうではなかったか。根室地方のオホーツク・擦文両文化の接触の結果生まれたトビニタイ文化と、擦文文化について検証したい。

遺跡の分布についてであるがオホーツク式土器の貼付浮文土器（e群）の分布は、知床半島、根室半島に限られている。トビニタイ期になると根

室水道に面した両半島の中間の地域に（内陸部を含め）分布するようになる。一方、擦文文化の遺跡は薫別川から知床半島側には殆ど分布しない。次に住居についてである。トビニタイ期では、石組みを伴う炉は存在するものの、オホーツク文化の住居にみられるような「骨塚」はなくなる。トビニタイ期の集落遺跡は、羅臼町オタフク岩、標津町カリカリウスなどで発掘されている。同時に2、3軒ほどの住居が存在していると考えられるような結果が得られている。また調査例では、住居同士の重複があり、オホーツク文化にもこのような調査例は多く、この伝統をひくものと考えられる。土器文様には貼付浮文を受け継ぎ、器形からも擦文土器とは一線を画した特徴を伝統として維持している。

次に擦文文化についてである。とくに擦文文化の終末の時期には、根室地方では平面が方形の竪穴のほかに長方形の住居が現われる。長軸上には複数の炉を持ち、伴出遺物は少ないことが特徴である。このころになると擦文文化自体が変容するのではなからうか。一方トビニタイ土器を持った人びとは独自の伝統を捨てていない。このように考えるとオホーツク文化の伝統というものが後のアイヌ文化に受け継がれたと言うことには疑問を感じるものである。

【講演】

■ 吉崎昌一氏（静修女子大学）

「北海道遺跡出土の栽培植物」

遺跡の土から栽培植物の種子を取り出すことから、どんなことがイメージできるかをお伝えする。種子の取り出し方は、浮遊選別法といって、目の細かい篩を使って水に浮かせた炭化物から種子だけを集めるのである。この技術は1960年代にアメリカに行った研究者が持ち帰った。この方法によって分析したところ、北海道の縄文時代の遺跡ではオオムギ、ヒエ、擦文時代の竪穴ではヒ

エ、アワ、キビ、オオムギ、コムギの炭化種子が発見されている。コムギは現在のものより小さいタイプ（品種）であることが分かった。また道東の擦文文化遺跡やオホーツク文化遺跡から発見されるオオムギは、他の地域の擦文文化遺跡から発見されるオオムギとは異なることが分かった。このように浮遊選別法によって、各地の擦文遺跡から栽培植物が発見されるという状況が生まれている。このことから、これまでのように単純に「時代」を捉えることを戒めたい。条件の良い所では農耕をやり、そうでない所ではいろいろな物流システムがあり、サケもその一部だったのではないか、そう考えるのが自然ではないだろうか。アイヌ民族の記録に残る栽培植物は擦文文化の段階で、間違いなく全部あると考えていい。そのことがつながるのかどうかは、まだ考古学的な資料が揃っていないところがあり不確定な部分があるが。

【討論】

続縄文から擦文文化、アイヌ文化を生業から考えることを中心に事例研究発表、講演をいただいたあと全体を通して、会場の参加者との質疑を中心に討論を行いました。その一部を紹介します。

◆擦文時代の狩猟具、そしてそれによる生産について佐藤氏は「鋸先のスリットを観察すると石器が鉄製品に置き替わってゆくのわかる。海獣猟は蛋白源ばかりではなく毛皮という交易品を手に入れるためだったのではないかとし、齋藤傑氏（旭川市教育委員会）からは、擦文時代の海獣猟、サケ漁というのは、そういった「鉄」を得るための代償としての生産だったという見解が示された。

◆西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）からは、「河川流域の擦文集落は、サケ・マス漁との関連で理解されるが、栽培植物の利用という視点を強調するとこれまでの遺跡立地に対する考え方に矛



盾はないだろうか」という疑問が出された。吉崎氏は「現在はふ化事業の結果、サケが大量に川に戻ってくるが、そのような状況が当時もあったとは考えられない。川の流域に集落が形成されたからといって、川漁が主体だと決めつける必要はないと思われる。雑穀などの炭水化物を大量にとるときは動物蛋白が必要になるがそのためのサケ漁の場として、また川が輸送のシステムに組み入れられていたことを考えると河川の側に集落があるのは理解できる」とした。これに関連して、北太平洋諸民族の間ではサケ、海獣類の利用が一般的で、北海道に暮らす人びとにとっても例外ではなかったのではないかと指摘もあった。

◆吉崎氏は、栽培植物種子の存在が直接的にそこに農耕があったことをあらわしているとは限らず、とくに自然条件が悪い地域では他の地域からの持ち込みの可能性を指摘された。山田悟郎氏（北海道開拓記念館）は、擦文時代の農耕を考える上では年平均気温が今よりも高いという自然条件が作用したということも考慮に入れるべきということを示された。

なお、『アイヌ文化の成立を考える』をテーマとしたフォーラムは、本回で一区切りとします。アイヌ文化の成立をめぐる、いまどのようなことが課題となっているのかななどを考古学の最前線で活躍されている方にお話しいただき、また討論等を通して、地域研究にいくらかでも貢献できたのではないかと考えています。

当館では、事業報告書の刊行を望む声にお応えして、現在、この作成に取り組んでおり、春に刊行を予定しております。詳しいことはお問い合わせください。

（学芸課 青柳文吉）

平成7年度

地域国際交流フォーラム

社会の様々な分野で国際化が急速に進展している今日、道内においても在住外国人が増え、道民が異なった文化をもった人びとと接する機会が増えています。両者の交流を更り豊かなものにし、互いに住みよい地域社会を築くためには、北海道の文化に対する認識や、国際交流の在り方についての学習の場を各地域において拡充する必要があります。

このため北海道や北海道が位置している北方圏の文化及び交流の在り方についての学習機会を提供し、市町村における国際交流に関する学習機会を提供する指導者を養成することを目的に、地域国際交流フォーラムを北海道教育委員会と当館を管理運営する財団法人北方文化振興協会の主催で10月19、20日に網走セントラルホテルほかで開催しました。

ツルネン マルテイ氏（文化評論家）による講演「地球市民の目」ほか、映像フォーラム、パネルディスカッション、体験交流、博物館視察などが行われました。



体験交流の様子

常設展示室



常設展示第3テーマ「オホーツク文化・海の狩人」で、今年度の調査で発掘した^{さつもん}擦文土器の展示をはじめました。

開館5周年記念企画展

ノーザンピープルズ **Northern Peoples** ~北方地域にくらす諸民族~

平成8年2月6日-3月24日

会場：当館特別展示室 観覧は無料です

常設展示では民族ごとに完結する方法をとらず、テーマ別になっていますが、本展では異なる地域に暮らしてきた各民族の歴史と文化について、衣類を中心に紹介しています。

国内にも数少ないアサバスカ・インディアンの資料（原ひろ子氏所蔵）やイヌイトのアザラシ皮製カヤックなどを展示していますので、ぜひご来館ください。



Q

移動展でグリーンランド・イヌイトの桶を見ました。全体は小さくて、美しい象嵌が施してあり、どのように使う物なのかと疑問に思いました。

A

ご覧になられた桶2点(表紙写真参照)の高さは、それぞれ21.3cm、13.3cmと実用には少し小ぶり、特に小さい方は模型として作られた物かもしれません。

この資料のように、取っ手状の横木が付いているものは水桶です。切り出した雪をこの横木と口縁部で支えるように上にのせてランプの側に置いておくと、溶けた滴が桶の中に溜るようになっていきます。水を汲むためのひしゃくもありますが、飲むときには牙や骨で作られたストロー状の管を用いることもあります。この管が桶の側板に埋め込まれて、縁飾りのような吸い口がついた桶もあります。似た形で横木がなく、水桶よりも

小さめのタイプは尿を溜めておくために使われる桶で、尿は皮をなめすときなどに利用されません。

構造は、桶板の形に削られた木を底板にそれぞれ木釘でとめ、口縁部も2枚の板を継ぐように牙製の薄い小片と木釘でとめて作られています。

象嵌されているのは、牙で動物や人間、カヤックをかたどったもののほかに、円や楕円など幾何学的な文様もあります。動物のなかではアザラシが最も多く、イッカクやシロイルカ、ホッキョクグマ、鳥や魚などが装飾されることもあります。象嵌は桶をはじめとする容器類のほかにも、投槍器やサンバイザー(雪の反射光から目を保護するための庇)、弓錐やナイフなどの狩猟具や道具類にも施されます。グリーンランド東海岸のアマサリク地方は、イヌイトのなかでも特に精緻な象嵌技術を持

つ地域とってよいと思います。

グリーンランドは、10世紀にヴァイキングによって移住がなされて以来、ノルウェーやデンマークの影響を受け、ヨーロッパからの移住者のない時代を経て、現在はデンマーク領となっています。1884-85年にアマサリクを踏査したG.ホルムの収集品の中に、すでに模型の船や桶などが含まれており、当時から玩具あるいは儀礼具等の目的でミニチュアを作る伝統があったことがうかがえます。

当館の資料がアマサリクで収集されたのは1912-22年頃とされ、この頃にはすでにヨーロッパを市場として、牙細工や室内装飾品などイヌイトの工芸品が作られるようになっていました。ヨーロッパ文明の影響を受けながら、大きな変化を始めた時代の作といえるでしょう。

(学芸課 齋藤玲子)

講演会 『モンゴロイドの拡がりとその文化』

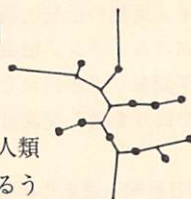
平成8年2月17日(土) 午後1時30分-4時30分 会場/当館講堂

「ホモ・モビリタス(人間)の旅」

講師 片山 一道 氏

(京都大学助教授)

アジアに起源をもつモンゴロイドは、人類の進化と現在の民族のなりたちを考えるうえで、最も興味深い人びとである。自然人類学の立場からモンゴロイドを概観し、研究の意義を語る。



「世界観・宇宙観の発展」

講師 大林 太良

(当館館長)

人類の生活様式の変化、文化の進化にともなう、世界観・宇宙観も変化していった。初期のおもな文化段階の特徴を示す世界観・宇宙観を概観する。

*聴講は無料です。参加を希望される方は電話で博物館へお申込みください。

寄贈資料紹介

○コリヤークの首飾りほか

札幌市の甲地利恵氏から以下の資料が寄贈されました。

ブーツの縁飾り1点、首飾り5点、腕輪1点(コリヤーク)首飾り1点(エヴェン)、首飾り1点(ヤクーツク収集)

○チュクチの矢筒模型ほか

札幌市の谷本一之氏から以下の資料が寄贈されました。

木彫り2点(コリヤーク)、矢筒模型1点(チュクチ)、呪術用護符/トウピラク1点(グリーンランド・イヌイト)

執筆ならびに出版社から贈呈を受けた書籍
(10月~12月)

Donald W.Clark 1991 *Western Subarctic Prehistory*. Canadian Museum of Civilization

Donald W.Clark and A.McFadyen Clark 1993 *Batza Téna: Trail to Obsidian*. Canadian Museum of Civilization

谷本一之編1994「北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム報告」

学習院考古会1995「考古学の世界」10

大林太良 1995「北の神々南の英雄」小学館

川村正一 1995「アイヌ語樹木名考」

主な来館者

10月24日 シシーギン・ニコライ・スピリドノヴィチ氏ほか東シベリアサハ共和国ホームコンサート一行6名

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

IN HOKKAIDO (10月~12月)

10/7 美術館のある町村が結束「ミュージアムロード」を作る 地図や共通券で集客を図る/A S

10/9 上ノ国町で擦文人の骨一体分初発掘 アイヌ民族との関係解明へ手掛かり/D

10/19 七飯町で続縄文後期遺体を包んだすだれ発掘/D (夕)

10/22 新サハリン紀行 再訪/林蔵の道 第3部 10/29まで6回シリーズ

10/24 余市・入船遺跡左右の手形土版、右の足形土版発掘/Y

10/26 サハリンの遺跡から国内と同型石器発見/A S

11/1 ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会終了/Y

11/15 アイヌ民族の伝統的精神を学ぶカムイドラノ協会設立10年記念し来年列島を横断歌や踊りを通し交流計画/D

*A S 朝日新聞(道東北網版)

D 北海道新聞(オホーツク版)

Y 読売新聞(北網版)

その他の行事報告

10/14 博物館クラブ

「楽しい火おこし体験」

講師 青柳文吉(主任学芸員)

10/22 講習会「インディアンのモカシンづくり」

講師 笹倉いる美(学芸員)

11/11 博物館クラブ

「サミのひもを織る」

講師 青柳文吉

12/9 博物館クラブ

「ビーズベルトを織る」

講師 青柳文吉

12/27 ロビーコンサート'95

「青少年のための

弦楽四重奏とソプラノの夕べ」

出演 札幌交響楽団員

萩原徳子氏

曲目 モーツァルト作曲

「ドン・ジョバンニ」より

ツェルリーナのアリア ほか



観覧者動向

10月~12月

	常設展示
10月	3,132名
11月	1,114名
12月	307名